

今週の為替相場見通し(2020年8月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		105.31 ~ 106.47	105.92	104.20 ~ 107.00
ユーロ	(ドル)		1.1695 ~ 1.1916	1.1787	1.1650 ~ 1.1850
(1ユーロ=)	(円)		124.00 ~ 125.58	124.85	123.50 ~ 125.00
英ポンド	(ドル)		1.2982 ~ 1.3185	1.3050	1.2900 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	137.75 ~ 139.24	138.26	136.50 ~ 139.50
豪ドル	(ドル)		0.7077 ~ 0.7242	0.7157	0.7060 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	75.10 ~ 76.44	75.82	75.40 ~ 76.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1) 今週の予想レンジ: 104.20 ~ 107.00 円

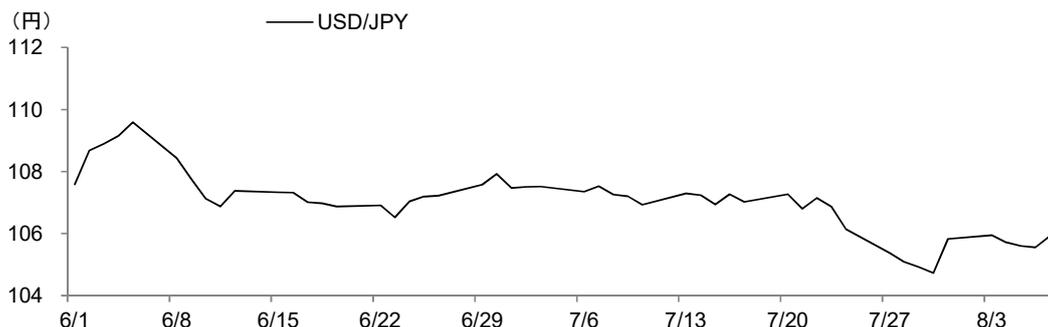
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場はドル安が継続する展開。週初3日105.85円でオープンしたドル/円は日系企業による大口買収報道が意識される中、仲値にかけて上昇し、一時106.40円台をつけたが、その後すぐに105円台後半まで反落した。その後米株先物が上昇する中、週高値である106.47円まで上昇した。翌4日は先週末からのドルの買い戻りの流れが一服し、106円台後半で一進一退の展開。その後は米金利が低下し、金価格が上昇する中ドル全面安となり、ドル円は105円台後半までじりじりと下落した。5日は米7月ADP雇用統計の結果が予想を大幅に下回ったことを受けてドル売りとなり、105.30円台まで下落。その後は米財務省が翌週の3・10・30年債入札を巡り、発行予定額が過去最高の1120億ドルとなることが伝わり、米金利が持ち直したことや米7月ISM非製造業景況感指数が予想を上回ったことでドル売りの流れが一服し、105.60円台まで値を戻した。6日は105円台半ばでの狭いレンジでの推移が続いたが、米国での追加経済政策を巡る議会協議の先行き不透明感強まる中、一時週安値の105.31円をつけた。7日は米7月雇用統計において非農業部門雇用者数や平均受給が予想を上回ったほか、失業率も予想を上回り、総じて強い結果となったことから米株先物や米金利が上昇し、ドル買いで反応し105.80円台まで上昇。その後一時的に下げる場面も見られたが、米政府が香港政府のトップら11名に制裁を科すことが伝わると、リスクオフのドル買いが強まり106円台をつけ、105.92円で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い推移を予想する。先週はナスダックが11000ドル台に乗せ、金価格が史上最高値を更新し、リスク選好地合いでドル売りが継続した。加えて米10年債利回りが0.51%まで低下していることもドル安を後押しした。FRBが今後の回復シナリオに慎重姿勢の中、米金利が持続的に上昇する可能性は低く、今週についてもドル安の流れに変わりはないと予想される。また、トランプ米大統領が追加の経済対策について大統領令に署名したことで、合意への期待感も高まっていることもドル安を後押ししよう。一方でクロス円は堅調に推移しており、一方的なドル安円高とはなりにくいと考えられる。今週は本邦がお盆休みに入り、取引参加者が少ない中106円を挟んで動意薄の展開を予想する。重要指標の発表は、12日(水)に米7月CPI、13日(木)に米7月輸出・輸入物価指数、14日(金)に米7月小売売上高(速報)、米7月鉱工業生産、米8月ミシガン大学消費者マインド(速報)を予定している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/3~8/7)の値動き: 安値 105.31 円 高値 106.47 円 終値 105.92 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.1650 ~ 1.1850 123.50 ~ 125.00 円

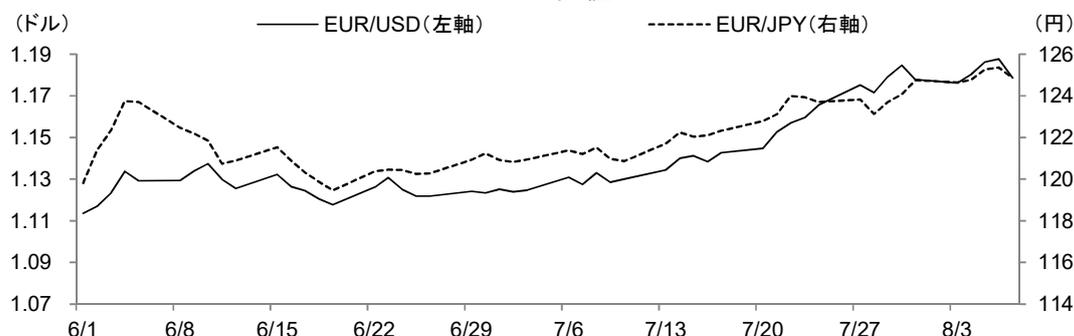
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、週央にかけて上昇後、週末は上げ幅を縮小する展開。週初3日、1.17台後半でオープンしたユーロ/ドルは、7月の独、仏、ユーロ圏製造業PMIが上方修正され上昇する場面もあったが、米金利の上昇を受けて一時1.1695まで下落。その後はユーロが買い戻され1.17台半ば迄回復した。4日は、米金利の低下や予想以上に上昇したユーロ圏6月PPIを受けて、一時1.1806まで上昇。その後1.1722まで下落するも、米金利低下・金価格上昇を受けてドル全面安の展開となる中、1.180台を回復。5日は、アジア時間は1.18台で底堅く推移。欧州株の堅調推移を受けてユーロ/円の上昇や、ドル全面安の流れにサポートされ、欧州時間に1.1862まで上昇。ADP雇用統計の結果が予想下回り、ドル売り圧力が強まると一時1.1905まで上昇。しかし、直近高値(1.1909)手前で上値が重くなり1.1860近辺まで反落。6日は独6月製造業受注が予想を上回ると1.1916まで年初来高値を更新するも、すぐに1.1832まで下落。しかし、米株の堅調推移を受けてこの水準で下げ止まる。その後薄商いの中、1.1894まで急伸。ドル安の流れが続き1.18台後半での底堅い推移が続いた。7日は、トランプ米大統領がSNSアプリを提供している中国企業との取引を禁じる大統領令に署名し、リスクオフのドル買いが優勢となり、1.18付近まで下落。その後、ユーロ/ドルは6週間連続で上昇を続けていたこともあり、ポジション調整の売りも見られる中、1.18を割り込み、一時1.1756まで下落し、1.1780近辺で越週した。週明けは1.17半ば付近を推移。124円半ばから週初始まったユーロ/円は前述のユーロ買いの流れを受けて一時125円半ばまで上昇するも、結局124.85円で越週した。週明けは124円半ばを推移。

今週のユーロ/ドル相場は調整局面継続から上値の重い推移を予想。経済指標を振り返ると上方修正される等、実体経済への明るさが見え始めている。しかし、復興基金合意を受けた楽観的な見方から、7月に一本調子でユーロは続伸したが、予想比良好な米7月雇用統計等を背景にしたドル買いや、利益確定売りのユーロ売りも相応にある。IMM通貨先物のポジションはネットロングが18年4月以来の高水準に積み上がっていることも意識され、ポジションの巻き戻しによるユーロ売りには警戒したい。今週の経済指標は11日(火)独8月ZEW調査、12日(水)伊7月CPI、ユーロ圏6月鉱工業生産、13日(木)独7月CPI(確)、14日(金)仏7月CPI(確)、ユーロ圏6月貿易収支、ユーロ圏4~6月期GDP(速)、ユーロ圏4~6月期雇用(速)が控えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/3~8/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.1695 高値 1.1916 終値 1.1787
(対円) 安値 124.00 高値 125.58 終値 124.85



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3150 136.50 ~ 139.50 円

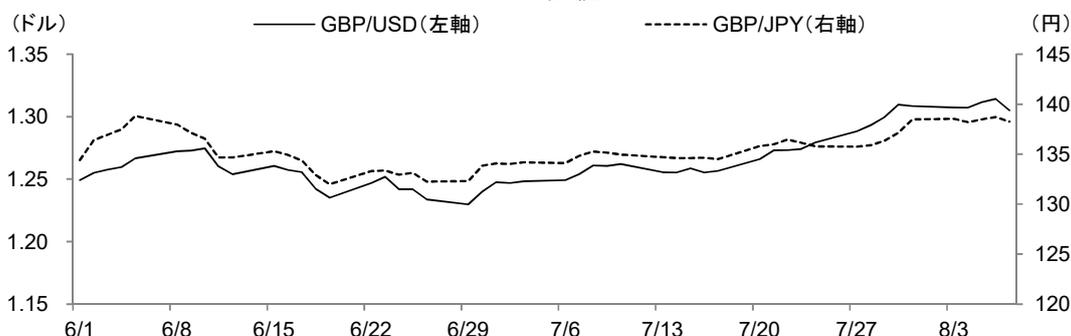
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、動意を欠いた横這い。対ドルでは下押しの先行から、反発、更に週引けに掛けて反落と上下動したものの、振り返って小動き、対円では更に狭い値幅を終始横這い、対ユーロでは下押しが支配的で、前週からは小幅水準を切り下げと、主要通貨に対しても値動きは様々だった。唯一目を引いたのは6日に観察された対ユーロでの一時的な上昇。所謂「両股開き(ポンド/ドルの下落と並行したユーロ/ドルの上昇)」の値動きで、明らかなポンド買いと言えた。タイミングから、英中銀金融政策委員会の結果発表に対する反応と思われたが、ベイリー総裁がマイナス金利導入の可能性を(少なくとも現時点で)否定したことが材料視されたのではないかと。全会一致(9対0)による基準金利、資産購入額上限の据え置きなどは市場の予想通りで、特段材料視されたとも思われなかった。週引けに掛け、特に対ドルでポンド下押しが進んだのは、7日発表された米7月雇用統計が、非農業部門雇用者数の増加が市場予想を上回るなど、予想対比で強めに出了たことを好感したドル買いの結果と考えられた。

今週の英ポンド相場は、引き続き方向感に乏しい横這いを中心に予想。英経済指標では、11日(火)に英雇用統計(7月失業保険申請件数や4~6月ILO基準失業率など)、12日(水)に英6月製造業/鉱工業生産、英6月貿易収支、英4~6月期GDP暫定値などの発表を控える。GDPは前期比20%を超える落ち込みが予想されており、コロナ禍とロックダウンの影響度合いを確認する上で注目される。一方、イングランドにおけるロックダウンは7月4日以降概ね解除されており、7月失業保険申請件数や同件数に基づく失業率は、英経済の立ち直り度合いを推し量る上で興味深い数字となろう。もともと、コロナ禍の影響などに関しては、単独の国/経済の最新動向だけを取り上げて、通貨市場が材料視するのは容易でないものとする。事態の鎮静化が期待されたかと思えば、第2波への警戒感が強まるなど、状況はあまりに流動的で確信が持ち難い上、流動的であるが故に他国/経済との比較も難しいからだ。もうひとつ、英関連で重要なEU離脱後の将来関係を巡るEUとの交渉だが、既に英/EU共政治は夏休みの空白期間に入った感が強く、合意に向けた前進にせよ、決裂に向けた後退にせよ、事態が明確に動く可能性は当面期待できない。昨年も、離脱交渉が一気に動き出したのは10月以降で、今年の将来関係交渉も、早くとも秋口までは膠着が続くとの見方は根強い。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/3~8/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.2982 高値 1.3185 終値 1.3050
(対円) 安値 137.75 高値 139.24 終値 138.26



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7060 ~ 0.7200 75.40 ~ 76.50 円

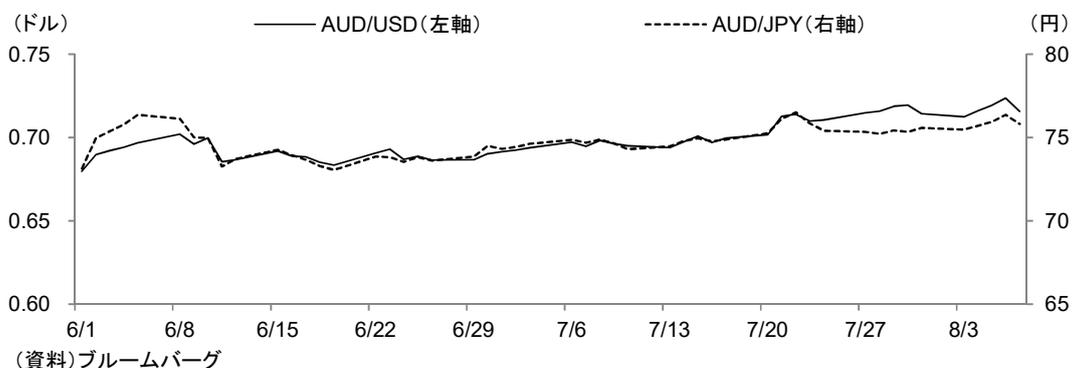
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、3日シドニー休場の中、動意薄く0.7150近辺でレンジ推移。米7月ISM製造業景況指数が予想を上回り、ドル買い優勢となると豪ドルは0.7080近辺まで下落。その後ハイテク株主導での米株上昇と共に豪ドルは0.7120台まで戻した。4日RBA理事会は予想通り政策金利据え置き。失業率は今年10%とまで上昇し、今後数年間は7%程度高止まりすると予想。インフレ率は今後2年間は目標(2~3%)を下回ると見ている。尚、豪3年国債利回りがターゲットをやや上回っていることに鑑み、セカンダリー市場にて国債買い入れ再開を発表。豪ドルは小高く反応したが続かずNY時間で米5年国債利回りが史上初の0.19%を割り込むと米ドル全面安の展開となり、豪ドルは0.7160近辺まで上昇。5日朝は強いNZ雇用統計を受け、AUD/NZD売りで豪ドルは若干0.71台半ばで始まるも、ドル安が進むにつれ上昇。NY時間では米株や原油、米債利回りが上昇しリスクオンとなり、ドル売りとなった。ADP雇用統計は予想値を大きく下回るも、前回値も大きく上方修正され、相殺された。しかしドル安の流れは収まらず、昨年2月以来の高値0.7241まで上昇。豪州メルボルンでステージ4での隔離や州境移動規制強化もさながら、米国内での感染拡大の状況や失業給付金の上乗せ措置が既に期限切れとなり協議が難航している事等が市場懸念になっている。また、巨額の財政支出やFRBによる大規模緩和や対中関係悪化でドル建て資産をアンダーウェイトするフローが出ており、一部ドル売りが発生している。6日モリソン豪首相が会見で豪3Q GDPが2.5%下振れする事や今年失業率が10%まで悪化する等の見通しを示すと豪ドルは徐々に値を下げ、0.7175まで下落。その後トランプ大統領が給与税減税と立ち退き猶予で大統領令発令を計画していると発表し、ドル売りとなり豪ドルは前日高値近辺まで上昇。7日は前日からのドル売りの流れを受け継ぎ豪ドルは朝に0.7242を付けた。その後発表のRBA四半期報告書ではウイルス感染拡大抑制に成功すれば強い経済回復は起こりえるとしたものの、直近のVIC州でのパンデミックが豪州全体での経済展望を揺るがしており、3Q GDPが2%pt押し下げられ、年末までに失業率は10%に上昇し、インフレは2022年末まで目標レンジの2-3%を下回る見通しとした。悪化する現況をリマインドさせる結果となり、豪ドルは0.72割れへ。その後は米雇用統計を控えはば0.7200-0.7220のレンジで推移。米7月雇用統計は雇用者数変化、失業率は共に予想を上回る強い数字となり、米10年債利回りが0.56%台へ跳ねる中、ドル買いとなり豪ドルは0.7145まで下落。その後0.71半ばに留まった。金や原油先物は下落。

今週は0.70-0.71台中心での推移を予想する。今週木曜に豪7月雇用統計が予定されているが、市場予想では雇用者数変化は前回値210.8kから25.0kまで減少する他、失業率は前回値から7.8%へ0.4%pt悪化するとみられている。VIC州メルボルンでのステージ4ロックダウン(都市封鎖)を受け、豪連邦政府は150億豪ドル(約1兆1,360億円)を投じ、一時帰休者を救済するため給与補助政策「ジョブキーパー」の対象範囲の拡大を発表。一方で、給与補助金の金額を11月と来年初めにそれぞれ段階的に削減するとしている。現状豪州ではコロナ累計感染者数が21,397人(現9,259人)、コロナ死者数が300人を突破。また、NSW州南部で集中豪雨が発生している為、今後の財政や経済回復の不確実性に不安が募る。先週金曜のRBAの発表の通り足下の現況悪化が懸念され、上値は抑えられるとみる。再度ドル売りに反転しない限り短期での高値更新は難しいとみる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/3~8/7)の値動き: (対ドル) 安値 0.7077 高値 0.7242 終値 0.7157
(対円) 安値 75.10 高値 76.44 終値 75.82



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなされるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。